テレビ視聴が働くことに対する価値観に及ぼす影響

○田島 祥¹・麻生奈央子² (非会員)・祥雲暁代²・坂元 章²

(¹ 東海大学チャレンジセンター・² お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

キーワード: テレビ視聴, 働くことに対する価値観, キャリア教育

The effects of viewing television on work values.

Sachi TAJIMA¹, Naoko ASOH^{2,*}, Akiyo SHOUN² and Akira SAKAMOTO²

(¹ Student Project Center, Tokai Univ., ² Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu Univ.)

Key Words: Television viewing, Work values, Career education

目 的

近年, キャリア教育の重要性が指摘され, 学校現場で推進されている。また, 子どもにとっては, 身近な人間関係を通して職業情報を得る機会も多い。一方, 職業に関する情報を獲得させる役割が相対的に大きいといわれるメディアの影響については十分に検討されてこなかった。そこで本研究では, もっとも身近なメディアの1つであるテレビ視聴が子どもの働くことに対する価値観に及ぼす影響を検討する。また, キャリア教育等の職業情報への接触による調整効果も検討する。

方 法

調査対象者と手続き 調査会社を通じて2波パネル調査を行った。2013年12月に, NHK2局と在京4局が視聴可能な34都道府県に住む15歳~18歳のモニター5,913名に1回目の調査(T1)を配信した。3カ月後, 回答者579名の中から不真面目回答者を除外し, 残った540名に2回目調査(T2)を依頼した。回答者から不真面目回答者を除いた250名を有効回答とした(男性115名, 女性135名, 平均16.44歳, SD=.67)。

調査の構成 性別や年齢などに加え, 以下の項目を尋ねた。1) テレビ視聴量(T1) 平日と土日の1日平均テレビ視聴時間を尋ねた。平日を5倍, 土日を2倍したものを加算し, 週あたりの平均時間(分)とした。2) ドラマ視聴量(T1) 1日平均ドラマ視聴時間を, 「全く見ない」から「4時間1分以上」の10段階で尋ねた。3) 働くことに対する価値観 (T1, T2) 「就職することによって実現が期待される価値」を項目化した期待価値尺度(浦上, 1992)の51項目について, どの程度それを期待し, 就職先を決めたいと思っているかを「全く期待しない」から「強く期待する」の5段階で尋ねた。4) キャリア教育(T2) 高校で実施されているキャリア教育を20種挙げ, 最近3か月の間に取り組んだ程度を「そのような学習や指導はなかった」から「積極的に取り組んだ」の4段階で尋ね, 加算した。5) 家族との仕事に関する会話(T2) 家族と仕事について話したり教えてもらうことはどのくらいあるかを, 「全くない」から「よくある」の4段階で尋ねた。6) 職業者対面得点(T2) 医者, 警察官などの10種類の職業を挙げ, 最近3ヶ月の間に直接会う機会があったかを「全く会わなかった」から「毎日会った」の4段階で尋ね, 加算した。7) 職業情報接触得点(T2) 最近3ヶ月の間に, 上述の10種類の職業について話したり聞いたりしたことがあるかを, 6種類の情報源ごとに尋ね, 加算した。

結 果 と 考 察

働くことに対する価値観の因子構造 期待価値尺度は17の下位尺度で構成され, さらに4つの因子から構成される(浦上, 1992; 谷田, 2007)。そこで, 該当する3項目を合計して下

位尺度得点を算出し, 4因子を指定した因子分析を行った(主因子法・バリマックス回転・累積寄与率66.80%)。先行研究と概ね一致した因子構造が得られたため, 同様に「内面性実現」「活動志向」「ステイタス志向」「自律志向」と命名した。

テレビ視聴が働くことに対する価値観に及ぼす影響 因子ごとに, T1の価値観と, テレビ・ドラマ視聴量を独立変数とし, T2の価値観を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果, テレビ視聴については有意な結果は得られず, ドラマ視聴については, 視聴量が多いほど「活動志向」が高まる傾向がみられた($R^2=.37, F(2, 247)=73.95, p<.001; \beta=.09, p<.10$)。

キャリア教育等による調整効果 4)~7)の変数をそれぞれ中央値分割し, 低群と高群に分けた上で, 群ごとに上述の重回帰分析を行った。テレビ視聴についてはいずれも有意な結果は得られなかった。ドラマ視聴についての結果を表1に示す。「内面性実現」では, いずれも有意な結果は得られなかった。「活動志向」では, キャリア教育への取り組みや職業情報に接する機会が多かった群において, ドラマ視聴が多いほど志向が高まる傾向が見られた。また, 家族との仕事に関する会話や職業者への対面が少なかった群において, 同様の結果がみられた。「ステイタス志向」では, 家族との仕事に関する会話が少ない群では, ドラマ視聴が多いほど志向が高まり, 会話が多い群では志向が低まる傾向がみられた。「自律志向」では, 職業情報への接触が低い群において, ドラマ視聴が多いほど志向が高まる傾向がみられた。

以上の結果より, テレビ視聴量全体では, 働くことに対する価値観への影響は見られなかった。ドラマ視聴量については, 活動志向を高める傾向が見られた。活動志向は, 「自分の仕事に何らかの冒険や危険が伴うことを感じること」「仕事をしながらあちこち動き回ること」等の項目が含まれており, ドラマに描かれる働く姿が影響する可能性が考えられる。また, キャリア教育等の調整効果については, 有意傾向ではあるものの, 価値観の種類によって影響が異なる可能性が示唆された。例えば「ステイタス志向」では, 家族との仕事に関する会話の量によって影響の方向が異なっていた。この志向には, 経済的報酬や昇進, 社会的評価などの外的な報酬に関わる下位尺度が含まれており, 家族という身近な関係からの仕事に関する情報が, これらの志向を低める可能性が考えられた。今後は, キャリア教育等についてより具体的な内容に焦点を当て, 詳細な検討を行ってきたい。

引用文献 谷田親彦 (2007) 大学生が希望する職業の価値観に関する分析, 弘前大学教育学部紀要, 98, 59-65. / 浦上昌則 (1992) 価値観についての進路発達の研究, 進路指導研究, 13, 15-21.

謝辞 本研究はJSPS科研費25780374の助成を受けたものです。

表 1. キャリア教育等による調整効果 (標準偏回帰係数)

	④キャリア教育		⑤家族との仕事に関する会話		⑥職業者対面		⑦職業情報接触	
	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群
内面性実現	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
活動志向	n.s.	.141 [†]	.147 [†]	n.s.	.320 [†]	n.s.	n.s.	.136 [†]
ステイタス志向	n.s.	n.s.	.124 [†]	-.127 [†]	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
自律志向	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	.130 [†]	n.s.